羅生門

名前

年　組　番

(1)羅生門の修理などは、もとより誰も捨ててカエリみる者がなかった。（五六・1）

顧

(2)ヌスビトが棲む。（五六・2）

盗人

(3)高いシビの周りを鳴きながら、飛び回っている。（五六・7）

鴟尾

(4)それがゴマをまいたようにはっきり見えた。（五六・8）

胡麻

(5)ところどころ、クズれかかった、（五六・11）

崩

(6)そのニゴった、黄色い光が、隅々に蜘蛛の巣をかけた天井裏に、（六〇・1）

濁

(7)火の光の及ぶ範囲が、思ったよりセマいので、（六〇・8）

狭

(8)老婆は、松の木切れを、床板の間にサして、（六一・11）

挿

(9)オオマタに老婆の前へ歩み寄った。（六二・13）

大股

(10)慌てふためいて逃げようとする行く手をふさいで、こうノノシった。（六三・2）

罵

(11)ちょうど、トリの脚のような、骨と皮ばかりの腕である。（六三・6）

鶏

(12)ヘビを四寸ばかりずつに切って干したのを、干し魚だと言うて、（六五・5）

蛇

(13)この老婆をトらえた時の勇気とは、（六六・4）

捕

⑭下人はアザケるような声で念を押した。（六六・10）

嘲

⑮おれが引剝ぎをしようとウラむまいな。（六六・13）

恨

⑯足にしがみつこうとする老婆を、手荒く死骸の上へケタオした。（六六・15）

蹴倒

⑰外には、ただ、コクトウトウたる夜があるばかりである。（六七・8）

黒洞々